正義なき和平：ハマス武装解除はパレスチナの大義の解除だ

ランジャン・ソロモン（インドの政治評論家、人権活動家）著、パレスチナ・クロニクル、１０月２１日

＊脚注はすべて訳注

ハマス指導者ヤヒヤ・シンワールの家屋前に立つアル＝カッサーム旅団のメンバーたち（ハーン・ユーニスにて）（Photo: via QNN）

植民地主義者たちは、和平達成のためにハマス武装解除を主張する。しかし正義の実現をしない和平はアパルトヘイトを強化するだけだ。ハマスはイスラエルの抑圧と占領から生まれた。それは国際法で保証された抵抗権を行使している存在だ。

「先ず正義を実現しよう、それから和平だ。逆にしてはいけない」

ガザ停戦が発表されるたびに、ワシントンとテルアビブがから同じリフレインが聞こえてくる；「ハマスの武装解除」。この植民者たちの合唱に、武器の放棄が和平をもたらすと装う自称調停者も加わった。しかし、正義のない平和は墓場の静寂にすぎない。イスラエルの占領を止めさせないでハマスに武装解除をさせるのは、和平にならない —それは別の名のもとにアパルトヘイトを強化するだけのことだ。

世界が認めようとしない真実は、占領支配の存在がハマスを生み出したことである。占領がなくなれば、それに対する武装抵抗は存在理由を失う。占領支配をそのままにしてパレスチナ人に戦う手段を放棄せよと求めるのは、彼らに永遠に占領者に従属せよと求めることだ。

占領こそが暴力の源であるという確信は、固く持ち続ける価値がある。ガザからイスラエルにロケット１発が発射されたのを「テロだ」と騒ぐ前に、イスラエルの植民地事業が数百万人のパレスチナ人を郷土から追い出し、土地と財産を奪い、何十万人も殺害したことを思い出すべきだ。１９４８年のナクバは７５０，０００人の難民を創造し、５００を超える村

を破壊した。１９６７年戦争でイスラエルは西岸地区、ガザ回廊、エルサレムの支配を確立し、その後６０年間これらの地域の人々は、パレスチナ人の土地と水と移動と人間的尊厳を否定する残酷な軍事占領下で暮らしてきた。

ガザ回廊は２００７年から封鎖され、２００万人の人々が、清潔な水も電気もない不自由な野外刑務所で暮らしてきた。イスラエルがガザの空、海岸、輸入、輸出を支配し、ガザに搬入される食物のカロリーさえも支配した。これは経済面における集団懲罰で、住民ばかりか住民の可能性をも殺害する緩慢な暴力である。こういう残酷な状況を考慮しないで、住民の抵抗に「テロ」というレッテルを貼るのは知的不誠実である。ハマスから暴力が始まったのではない。それは植民地化から始まったのだ。

抵抗は法的にも倫理的にも虐げられた人民の権利であり、国際法もそれを権利として認めている。１９８２年の国連総会決議３７/４３は、植民地支配や外国支配下にある人民が「利用可能なあらゆる手段、武力闘争を含む」占領に抵抗する権利を認めている。この原則は、アルジェリア、南アフリカ、ナミビアの解放闘争支持に適用された。何故パレスチナの解放闘争に適用されないのか？

植民地化された国は外交解決ができないときは武力抵抗せざるを得ない。南アには「ウムコントウ・ウェ・シズウェ」（民族の槍）というネルソン・マンデラ率いる準軍事組織があり、アルジェリアにはFLNがあり、ベトナムは数十年にわたり外国軍と戦った。これらの運動を西側諸国は後になってから賛美したが、同じことをやっているパレスチナ人を「テロ」と非難するのだ。

イスラエルとその同盟国が「テロ」と呼ぶものは、必死に存在を主張する行為である。パレスチナ人は国際法が発動されるのは強者を守るためだけであることを、経験から学んだ。弱者の抵抗権は、国際社会や国際法の許可なく行使するしかないことを、経験から学んだ。

ハマスに降伏を要求する西側は、ウクライナのロシアに対する武装抵抗と攻撃を喝采する。ヨーロッパの諸政権はウクライナに武器を供与し、ウクライナを主権を守る自由の戦士と称えるが、パレスチナが抵抗すると「テロ」と非難するのである。そこに見られるメッセージは明白で、白人のレジスタンスは英雄的行為で、有色人のそれは「野蛮行為」なのだ。この人種差別的偽善は西側外交政治の道徳的破産を露呈している。彼らにとって、誰が抵抗するかが重要なのだ。このバイアスの背後により深い共謀関係がある；イスラエルはアラブ世界における西側の軍事的前哨基地であり、西側の権益の守護者であり、それゆえ財政的・外交的保護を受け続けているのだ。

だから、トランプとネタニヤフがハマス打倒を通じた「和平」を説くのを、人民運動は批判し止めなければならないのだ。彼らが説く「和平」はアパルトヘイト下の「和平」である[1]。つまり、パレスチナ人の自由の墓場の上に漂う強制された静寂である。

はっきりさせよう。ハマス武装解除は中東から暴力をなくすためではない。赤裸々な真実は、ハマス武装解除はパレスチナの大義を殺害することである。それは抵抗を無くすことが目的である。それはイスラエルのガザ支配の道を拓くことである。それは西側の民間業者にガザ復興事業を請け負わせる道であり、ＰＡのようにイスラエルに協力する新たなパレスチナ人階層をガザの主要アクターにする道である。だから、米政府とイスラエル政府は「ポスト・ハマス・ガザ」—権利を要求せず、命令に従うガザ—を作るのに熱心なのだ。

ハマス武装解除が意味するのは、ガザにおけるパレスチナ民族主義の政治的中核を抹消することだ。解放運動を人道危機に変えて、救済機関やドナーのお慈悲の世話の対象とすることだ。パレスチナを主権主体ではなく、慈善対象とすること、これがイスラエルや西側列強が望んでいることだ。しかし、命令や指示で抵抗を消すことはできない。占領が続く限り、ハマスが居なくなったとしても、新たな抵抗勢力が生まれる。植民者にとって厄介なのはハマスではない；抹消されるのを拒否する人民の存在である。

持続的平和への唯一の道は正義の実現である。正義は、まず占領の終了、パレスチナ人から奪った土地の上に作った入植地をすべて解体し、１９７３年国境を回復することか始まる。西岸地区の違法入植前哨地をすべて解体し、エルサレムを本当に解放されたパレスチナの首都とすることだ。こんなことは決して過激な要求ではない ー 国際法に基づく最低限の要求で、本当の解決への出発点である。１９７３年国境（１９６７年以前の「国境」、いわゆる「グリーン・ライン」）は、こ

[1] トランプの「停戦」は、イスラエルの攻撃を自由にさせて、ハマスに抵抗をやめさせる「停戦」であることは、日々の事実が証明している。

れまで提案された中で一応説得力がある和平処方箋であろう。イスラエルは１９６７年戦争や１９７３年戦争で次々と領土を拡大し、多くの国連決議を無視して入植地を建設し、その犯罪に対して何の罰も受けないのだ。

従って、真の和平への過程は、イスラエルへの責任追及から始めるべきだ。国際刑事裁判所は戦争犯罪を調査し裁くべきで、国際司法裁判所は判決を執行し、イスラエルがそれに従わなければ、国際的制裁を加えるべきだ。せめてこの程度のことをしなければ、アパルヘイトが名前を変えて続くことになる。

これ以上のオスロ合意的策略の繰り返しは解決を先送りするだけで、パレスチナ人をますます苦しめるだけだ。パレスチナ人はこれまで常に騙されてきた。１９９３年のオスロ合意は和平へのロードマップと売り込まれた。しかし、実際には、経済的依存と治安協力という形でイスラエル支配を強化しただけだった。オスロ合意はパレスチナ領を分断化し、入植地拡大と増殖を助長し、パレスチナ人よりはイスラエルに奉仕するパレスチナ自治政府（PA）が創設された。

もうそのような生半可で親イスラエル機構の繰り返しは御免だ。新しい合意は根本的な原因 — 占領、所有権奪取、アパルトヘイトを取り上げるものでなければならない。ガザ封鎖の完全解除、政治犯の釈放、難民の帰還権、パレスチナ主権に対する国際的保証がなければならない。それらがなければ、和平は蜃気楼だ。

二国解決案は死んだと思う人々がいる。そもそもそれは最初から生きていなかった。占領地の地図 — 入植地、分離壁、軍検問所の存在でパレスチナの地図は修復不可能なほどにズタズタにされている。本当の民主主義的で公正な未来社会をつくるためには、二国案とは異なる想像力が必要だ。分離ではなく、公正に基づいて、ユダヤ人とアラブ人が平等な権利で暮らす単一国家を想像してはどうだ。そのような発想に抵抗するのは、悪意でアパルトヘイトを施行する人種差別者や植民地主義者であろう。南アフリカの人々は、自分たちが経験したアパルトヘイトはイスラエル版アパルトヘイトに比べたら「お茶会のようなものだった」と、本気で言っている！

単一国への移行は時間がかかる。長い過渡期があるだろう。非軍事化、パレスチナ人への損害賠償、憲法による保障、真実調査委員会等々多くの課題を乗り越えなければならない。しかし、原則は単純明解である。みんなが平等で、誰にも特権がないことだ。このような共同社会は都合の悪いことの否定の上に築くことはできない。植民地主義の犯罪を認め、それを矯正する決意から始まる。そういう厳しい過程を経てユダヤ人とアラブ人は、占領者と被占領者ではなく、平等な市民同士として共存できるようになる。

国際社会がお経のように唱える「両者は戦闘をやめよ」は、力の圧倒的不均衡を曖昧にしている。イスラエルは大国米国の支援を受けた核兵器保有国で、占領で収奪する経済を持った国家であり、ハマスは封鎖と必死のあがきから生まれた抵抗運動である。両者を等価にして論じるのは、歴史と倫理を抹消する行為である。

要するに、ハマスに武装解除を迫るのはパレスチナ人に降参して屈服せよと迫ることである。それに対して、植民地主義を止めろと求めることは正義を求めることである。この二つの間にこの紛争の全体的倫理地図がある。正義のない和平はインチキである。

被抑圧者を沈黙させるやり方では和平はやってこない。和平が来るのは、占領を終結し、難民が帰還し、入植地が解体され、子どもたちが封鎖から解放されて育つようになるときである。その時が来るまで、抵抗する権利は法的に正当であるばかりでなく、神聖なものである。